

令和 5 年 5 月 17 日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K19906

研究課題名（和文）日本版子どもの活動・参加に関する評価法の開発 特別なニーズがある子どもへの活用

研究課題名（英文）Development of the Japanese version of the evaluation method for children's activities and participation - Application to children with special needs

研究代表者

五十嵐 剛 (Igarashi, Go)

名古屋大学・医学系研究科（保健）・講師

研究者番号：50735199

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、子どもの活動と参加に関する評価法である日本版PACSを開発することであった。本研究期間において、まず日本版PACSに含まれるアクティビティ項目の絵カードを作成した。次に、特別なニーズがある子どもの活動参加評価を、実際に日本版PACSを用いて行った。結果、特別なニーズがある子どもの活動参加状況はカテゴリーごとに偏りがあること、感覚処理特性との関連があることが見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで日本国内で使用可能な就学前児の活動参加を定量的に評価することのできるツールは存在しなかった。本研究により日本版PACSの開発を行ったことで、今後地域で働く作業療法士らが対象児の生活全体を捉えて支援・介入を行うことや、多職種や養育者と支援目標や理解の共有や容易になること等が期待される。また、疾患や障害毎に特徴的な活動参加パターンの分析等、今後の研究への波及効果も高い。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a Japanese version of PACS, an assessment method for children's activities and participation. During this research period, we first created picture cards of the activity items included in the Japanese version of PACS. Next, we attempted to evaluate the participation of children with special needs using the Japanese version of PACS. The results found that the participation of children with special needs was characterized by category and was associated with sensory processing characteristics.

研究分野：作業療法学

キーワード：活動 参加 幼児 評価

1. 研究開始当初の背景

厚生労働省が提案する「地域共生社会」では、地域包括ケアで支援の中心とされてきた高齢者だけでなく、障害者や子どもに対する支援も重要視されており、特別なニーズがある就学前の子ども（以下、就学前児）の地域生活支援も重要な課題となっている。

特別なニーズがある子どもは、定型発達を示す子どもと比較して感覚調整障害や行為障害が認められ、日常生活や集団生活への活動制限と参加制約が生じ、支援を必要としている。そのため地域の小児病院や児童発達支援センターで就学前からその特別なニーズに対する対応が行われ、OTも専門職として支援を行っている。

これまで OT は特別なニーズがある子どもに対し、感覚処理機能を中心とした機能面の評価から活動・参加制限を捉えて介入を行うことが主であった。しかし地域包括ケアに重点が置かれる中で、今後は特別なニーズがある子どもの地域生活全体を捉えてその活動・参加の実態を把握し、地域生活を送る中での支援ニーズを導くことが重要であり、そのための測定道具が必要である。しかし、OT等が活用できる、就学前児の地域生活を包括するような活動・参加を捉える評価法は国内に存在せず、本邦で就学前児の活動・参加に関する評価法の開発は喫緊の課題であると言える。そこで申請者は、子どもの地域生活を包括した活動・参加に関する評価法である **Preschool Activity Card Sort**（以下、**PACS**）に着目をした。**PACS** は国外でも唯一の就学前児の幅広い活動・参加を量的に捉えることができる評価法であり、アメリカの OT である Berg らによって開発された²⁾。**PACS** には就学前児が一般的に行う活動・参加 85 項目が「**Self-Care**」「**Community Mobility**」「**High Demand Leisure**」「**Low Demand Leisure**」「**Social Interaction**」「**Domestic**」「**Education**」のカテゴリーに分類されている。**PACS** の大きな特徴として、各項目が絵カードとなって分かりやすく示されているという点がある。絵カードを用いながら各項目の実施状況について養育者から回答を得ることで、活動・参加の実態評価と地域生活における具体的な支援ニーズを導くことができる。

2. 研究の目的

就学前児の活動・参加に関する評価法である日本版 **PACS** の開発を目的として研究を行った。現在、国内の小児リハビリテーション領域で用いられている評価法は、発達検査による能力の発達状況や日常生活動作に関するものが中心であり、地域生活を包括するような活動・参加を捉えることのできる評価法は存在しない。そのため日本版 **PACS** は子どもの幅広い活動・参加の実態を評価することのできる唯一の測定道具となり、高い独自性があると考えた。

3. 研究の方法

(1) 日本版 **PACS** に含まれる活動・参加項目の絵カード作成

申請者は本研究の開始前までに、他国の **PACS** 開発プロセス^{3,4)}に基づき日本版 **PACS** に含まれる活動・参加項目の内容的妥当性の確認を完了させた。そのため本研究では、日本版 **PACS** に含まれる活動・参加項目の絵カード作成を行った。日本版 **PACS** に含まれる活動・参加項目には「挨拶をする」など絵カードに言語的情報を加えたほうが分かりやすい項目が複数存在したため、絵カードはイラストにより作成することとした。イラスト化した絵カードは、その内容が活動・参加項目を的確に描写しているかを就学前児の養育者や保育士などを含めた複数人で確認することとした。

(2) 日本版 **PACS** の特別なニーズがある子どもへの試行

作成した日本版 **PACS** を用いて、実際に特別なニーズがある子どもの地域生活における活動・参加の実態調査を行うこととした。国内の発達支援事業所を利用する 3 歳から 6 歳までの就学前児の活動・参加評価を、日本版 **PACS** により児の養育者を対象として行った。また、活動・参加状況との関連を検討するため、短縮版感覚プロファイル（以下、**SSP**）による評価も同時に行った。

4. 研究成果

(1) 日本版 **PACS** に含まれる活動・参加項目の絵カード作成

日本版 **PACS** に含まれる活動・参加項目 98 種類について、イラストによる絵カードの作成を行った。各項目をイラスト化するにあたり、就学前児の養育者 2 名、保育士 2 名により内容を確認し、イラストの内容が活動・参加項目を的確かつ分かりやすく表現していることを確認した。

(2) 日本版 **PACS** の特別なニーズがある子どもへの試行

特別なニーズがある子ども 12 名の養育者を対象として、**PACS** による評価を行った。養育している子どもの月齢は平均 56.25 ± 10.38 ヶ月で、男児 10 名、女児 2 名であった。アクティビティ項目の実施数は平均 73.67 ± 9.62 項目で、平均実施割合は 76.5% であった。下位カテゴリーごとに見ると、実施率が高い順に「**Low demand leisure**」「**High demand leisure**」「**Self-care**」

「**Social interaction**」「**Mobility and community activity**」「**Education**」「**Domestic**」であった。**SSP** 合計スコアは平均 **70.58 ± 13.64** で、分類システムにおいて **8** 名が高い、**2** 名が非常に高いに該当した。アクティビティ項目の実施数と **SSP** スコアの関連については、「**Education**」の実施数と低反応・感覚探究セクションスコアの間に有意な負の相関(**rs=-.85, p<0.001**)、「**Domestic**」の実施数と低反応・感覚探究セクションスコア(**rs=-.70, p=0.012**)、聴覚フィルタリングセクションスコア(**rs=-.72, p=0.008**)の間にそれぞれ有意な負の相関を認めた。子どもの月齢とアクティビティ項目の実施数間に有意な相関は認めなかった(**rs=.18, p=0.57**)。

引用文献

1. **Green, D et al. (2016). Brief Report: DSM-5 Sensory Behaviours in Children With and Without an Autism Spectrum Disorder. J Autism Dev Disord, 46, 3597-3606.**
2. **Berg, C., & LaVesser, P. (2006). The Preschool Activity Card Sort. OTJR (Thorofare N J), 26, 143-151.**
3. **Stoffel, A., & Berg, C. (2008). Spanish translation and validation of the preschool activity card sort. Phys Occup Ther Pediatr, 28, 171-189.**
4. **Malkawi, S. H et al. (2015). Development of the Arabic Version of the Preschool Activity Card Sort (A-PACS). Child Care Health Dev, 41, 559-568.**

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Igarashi Go, Karashima Chieko, Uemura Jun-ichi	4. 巻 40
2. 論文標題 Items Selection for the Japanese Version of the Preschool Activity Card Sort	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 OTJR: Occupation, Participation and Health	6. 最初と最後の頁 166 ~ 174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/1539449220906794	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 五十嵐剛
2. 発表標題 地域で生活を送る就学前児の『作業』評価ツールの開発と今後の展望
3. 学会等名 第1回ヘルスサイエンス研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 五十嵐 剛、上村 純一、辛島 千恵子
2. 発表標題 日本版Preschool Activity Card Sortの開発
3. 学会等名 第53回日本作業療法学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------